



市民活動団体を紹介「市民活動突撃レポート！」

産後のお母さんを大きな愛情で支える

産後の母親は、「全治6ヵ月の怪我を負っている状態」と例えられるように、身体が妊娠時から元に戻ろうとする過程で様々な痛みがあったり、ホルモンバランスの急激な変化による気持ちの浮き沈みがあったりと、心身ともに不安定になります。休養が必要にも関わらず、産後すぐに24時間休みなしの育児が始まります。「ドゥーラさんだ」の菅原奈央さんは、「母親だから当たり前」と、ご本人も周囲も思いがち。食べること、寝ること、トイレなど自分のことは二の次にして頑張るお母さんたちを支えたいと話します。ドゥーラとは、ギリシャ語で「他の女性を支援する経験豊かな女性」という意味で、産前産後の母親の日常生活を支える専門家です。ドゥーラさんだでは現在、民間資格を取得した8人が活動しています。依頼のあった家庭を訪問し、赤ちゃんや兄弟の世話、掃除や食事づくりをサポート。保健師や助産師など母親に寄り添う専門家は他にもいますが、ここまで直接的な支援はドゥーラならではです。

これまで個人事業として活動していたメンバーが団体を立ち上げたのは、2021年。仙台市の「育児ヘルプ家庭訪問事業」受託のためでした。ドゥーラが必要とされる背景の一つは、頼れる人が身近にいない母親が多いこと。原因には、核家族化や晩婚化による親の高齢化などがあげられます。自治体との連携によって、ドゥーラ自体

の周知はもちろん、「人の手を借りることは特別なことじゃない」というメッセージを発信しています。

「些細なことでも頼ってほしい。手が回らなくて後回しにしていたことが一つ片付くだけで気持ちが楽になるから」と声を揃えるメンバー。安心して育児に向き合える環境を整え、母親と赤ちゃんの成長を見守ります。



▲育児の不安・悩みなど何でも相談できます

ドゥーラさんだ

TEL 050-3554-7728
月～金(祝日をのぞく) 9:00～17:00
折返しのご連絡は休日をのぞく
24時間以内に行います。



▲HP



活動に役立つ書籍を紹介「お役立ち本」

風水害・土砂災害 わが家の防災タイムライン

気象情報や警戒レベルに合わせて、「いつ」「だれが」「何をするのか」を事前に決めておく計画書「防災タイムライン」が作成できるキットです。作成を手助けしてくれるのは、高潮のメカニズムや風水害から身を守るポイントなどの防災知識を学習できる「防災ガイドブック」や、作り方の参考になる「制作ガイド」です。我が家だけの防災タイムラインを考えてみませんか？

監修:今村 文彦 編集・発行:東京法令出版



つながる つなげる サポセン

仙台市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。お気軽にご相談ください。

今月の休館日 9月13日(水)、27日(水)

開館時間 月曜日～土曜日 9:00-22:00
日曜日・祝日 9:00-18:00
休館日 毎月第2・第4水曜日(祝日の場合は翌日木曜日) 年末年始

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010 FAX 022-268-4042
[ホームページ] https://sapo-sen.jp
[サポセンブログ@仙台] https://blog.canpan.info/fukkou/

「ばれっと」バックナンバーは
ホームページからダウンロードできます。



ほぼ毎日更新している「サポセンブログ@仙台」で、取材の様子やこぼれ話を配信しています。

編集・発行 仙台市民活動サポートセンター (指定管理者: 特定非営利活動法人 さんだいまやぎNPOセンター)
発行日 2023年9月1日
デザイン PEACE Inc.

[X(エックス)] @SCSC4CA [YouTube] サポセンちゃんねる



ばれっと 9

仙台市民活動サポートセンター通信 ばれっと

「ばれっと」には、仙台市民活動サポートセンター(サポセン)にいろいろな人が集まり、それぞれの色(個性)が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

特集 これからの井土を皆で育む



一步踏み出す気持ち芽生える「ワクワクビト」

パフォーマンスで、
仙台をもっと楽しい街に

仙台市地域
おこし協力隊
黒脛巾組

かすが かつゆき
春日 克之さん(35)
ひらやま まさなり
森丸 平山 将匠さん(31)

ダンスやアクロバットを盛り込んだショーで観客を沸かせるのは、忍者ユニット「黒脛巾組」です。黒脛巾組とは、伊達政宗お抱えの忍者集団。扮するのは、パフォーマーの春日さんと平山さんです。映像や音楽に合わせたショーで、地域のイベントを盛り上げています。春日さんは、「自分のスキルを活かし、地域の歴史を楽しめる作品をつくるのが楽しい」とやりがいを感じています。平山さんは、「最近、忍者の格好で見て来てくれる子どももいて、やっつけて良かったと思う」と顔を綻ばせます。

春日さんは北海道出身で、幼少期から新体操に打ち込み、大学卒業後はパフォーマーとして活躍してきました。一方、平山さんは岐阜県出身。専門学校でダンスを学び、ダンサーとして活動してきました。それぞれ東京を拠点に活動してきた2人が、縁もゆかりもない仙台へ来るきっかけになったのは、新型コロナウイルスの感染拡大。イベントや舞台が次々と中止になり、パフォーマンスをする機会のない日々を過ごしていました。そんな中、舞い込んできたのは繋がりがあった仙台のパフォーマンス集団からのオファー。2021年、パフォーマンス集団が、宮城の食や歴史をPRしようと、仙台市観光課・地元企業と共催したショーレストランで、2人は黒脛巾組を演じました。その後、黒脛巾組として、観光コンテンツ創出や交流人口の増加を任務とする仙台市地



森丸

月丸

域おこし協力隊に就任。当初2人は、伊達家や黒脛巾組のことをほとんど知りませんでしたが、仙台での暮らしやコミックを通じて伊達家の歴史を学びました。「仙台に来てよかった。暮らし始めて、地域の魅力に気づき、どんどん好きになった」と、話す2人。「これからどんなことができるか楽しみ。大好きな仙台をもっと盛り上げたい」と、希望を抱いています。



▲奥州・仙台おもてなし集団 伊達武将隊とパフォーマンス



▲「あなたの推し地域選手権」では MCIに挑戦

仙台市地域おこし協力隊
黒脛巾組

Mail sendaiokkoshi@gmail.com



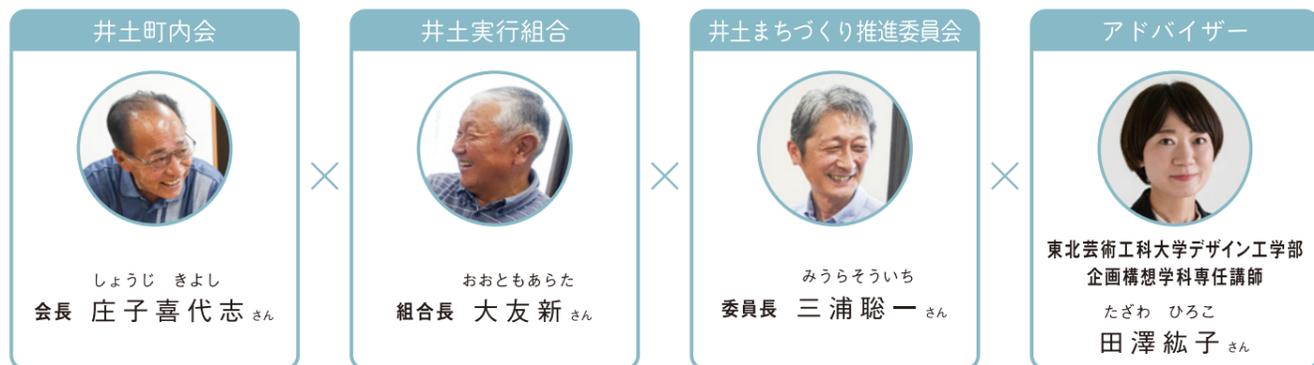
▲活動の様子は X(エックス)から

協働による活動事例を紹介「ちまたのコラボ」

これからの井土を皆で育む

仙台市若林区井土地区は、沿岸部に広がる農村地帯です。2011年の東日本大震災の津波により、住民36人が犠牲となり、地区内全ての家屋が全壊。肥沃だった田畑の土壌も一変しました。震災以前からの高齢化による人口減少、農業の担い手不足が加速しました。地域の復興をしようにも、井土の土地は、売ること、貸すことも、開発することもできません。井土の土地を子孫のために少しでも価値あるものにしたいと奮闘する人々の取り組みをご紹介します。

井土地区の価値を未来につなぎたい



消滅の危機に立つ井土

井土地区は、震災後、災害危険区域になるとの見込みがあり、住民の多くが集団移転しました。しかし、仙台市は方針を転換。災害危険区域から除外され、仙台市が土地を買い取ることはありませんでした。また、もともと井土地区は市街化調整区域であることから、原則、農家と分家以外は家屋新築が認められていません。その結果、震災前にあった103世帯のうち、再建したのは11世帯。住民の多くが営んできた農業は、井土で農業を継続する意思を持つ住民が農事組合法人井土生産組合を立ち上げ、農地の多くを取りまとめて管理し再開。復興のかたちを模索してきました。集団移転で井土を離れた三浦聡一さんは、震災後から2年半仙台市と宅地の利活用について交渉してきました。「仙台市が善処してくれると思っていたし、何とかかなと思っていた」と振り返ります。しかし、その後、井土地区の土地問題は膠着状態となりました。他の仙台市沿岸部が、震災からの10年で復興の兆しを見せる中、井土地区は進みあぐねていました。

「ふるさとを負の遺産として残したくない」と、現住民による井土町内会(以下、町内会)と、農地を持つ人々による井土実行組合(以下、実行組合)は、井土地区のまちづくりについて話し合いを重ねました。土地を残したまま井土を離れた元住民も「土地をどうかしなくては」という思いは同じです。農地を持たない元住民がまちづくりに参画するための受け皿として、三浦さんは井土まちづくり推進委員会(以下、推進委員会)を2021年7月に設立しました。機運高まる井土地区の背中を押したのは、当時、仙台市市民文化事業団に勤務していた田澤紘子さんです。被災地の地域文化を可視化するプロジェクトを企画・運営していた田澤さんには、「井土地区が直面している課題の解決に少しでも手を貸したい」という思いがありました。

住民の声と思いに寄り添う

田澤さんは、仙台市の「令和3年度(2021年)地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業」への申請を提案。結果、令和3年度から3年連続で採択されました。まず取り掛かったのは、井土地区の元・現住民の全世帯を対象にしたアンケートです。「ふるさと井土」の課題解決に皆で取り組むため、「今後の井土への関わりを望むか」「井土への思い」を問うと、半数以上の住民が「関わりたい」「ふるさとだから愛着がある」と回答。他にも「幅広い世代の声を聞いてほしい」などの意見が寄せられました。集まった意見やアンケート結果、それらを元にした推進委員会の会議の様子は「井土まちづくりレポート」として紙媒体やネットで井土地区内外に発信。元・現住民へのフィードバックにもなり、井土への関心を高めることにもつながりました。また、具体的な情報発信は、仙台市議や宮城県議の井土地区見学会に発展しました。それらを経て長期的なまちづくりのイメージを描いていこうと、現状の土地のあり方を理解するために、市職員を招いて土地利用に関する勉強会を開催。参加者皆が土地利用への漠然とした希望を手放したり、疑問を解消したりすることができ、これからの新しいまちづくりへの思いを確かめる機会になりました。

ふるさとに関わり続けるために

井土地区の消滅の岐路で、3者は新たな井土の価値を創出しようとして「ふるさとに関わり続けることができる仕組みづくり」を決意。例えば、地域資源の魅力を地域内外に知らせようと講師を招いて「自然環境学習会」を開催。井土に関わる人のみならず、近隣の地域から、自然が好きな人や親子連れが訪れ、賑わっています。三浦さんも、「井土の自然は、震災より前の状態に戻つつあるようだ。絶滅危惧種を含むカニが7種類もいるなんて知らなかった」と、地元の豊かさを再発見しています。また、震災で犠牲になった人たちの月命日である11日に、元・現住民が井土に集うきっかけにしよう

地域資源の利活用を軸にした「ふるさと」への関わり方を検証し、多くの人と継承していくための仕組みをつくる

被災で
世帯数激減

被災した宅地は
貸せない、
売れない、
建てられない
(農家と分家以外)

元・現住民の
高齢化



元住民

現住民

愛着とつながりが
育む新しいふるさと

近隣の
市民活動
団体

井土地区外
の市民

と「井土クリーン作戦」を実施。町内会会長の庄子喜代志さんは、「ごみ拾いや荒れた宅地跡の草刈りに、少ない時でも20人は参加する。作業後も話し込むのが楽しい」と笑います。さらに、多世代が集まる場づくりとして「井土プチマルシェ」を企画。マルシェの目玉は、何とんでも井土の採れたて野菜です。実行組合組合長の大友新さんは、「親子連れや若い人たち、井土を知らない人も買い物をしに来てくれる」と喜びます。マルシェ運営には、これまで復興支援で関わってきた企業や市民活動団体が協力。井土内外の人々が企画会議から参加し運営を支えています。



▲井土に人が集まる機会「井土クリーン作戦」

井土地区の未来を皆でつくる

土地の活用への関心が高まってきた2023年4月、推進委員会は「井土のこれから大会議」を開きました。元・現住民、井土に関心を持つ人などが井土に集まりました。「キャンプ場や広場を設けたい」「貸農園として活用したい」「芋煮会を開きたい」などのアイデアが挙がりました。また、「憩いの場やトイレがなく、気軽に来ら

れない」という声も。「集会所でお茶会をしよう」とアイデアを出したのは元住民の女性たちです。町内会は、集会所を月2回解放して協力。出入り自由のお茶会「井土かたらいスペース」が始まりました。三浦さんは、「土地を所有し続けることの課題は山積みですが、少しずつ前に進んでいる」と、手応えを感じ始めています。



▲「井土のこれから大会議」に集まった幅広い世代の人たち

この取り組みは、令和3年度から仙台市の地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業(PPJ)を活用しています。



▲PPJ

井土町内会

Mail ido9840842@gmail.com

井土まちづくり
情報局▶

